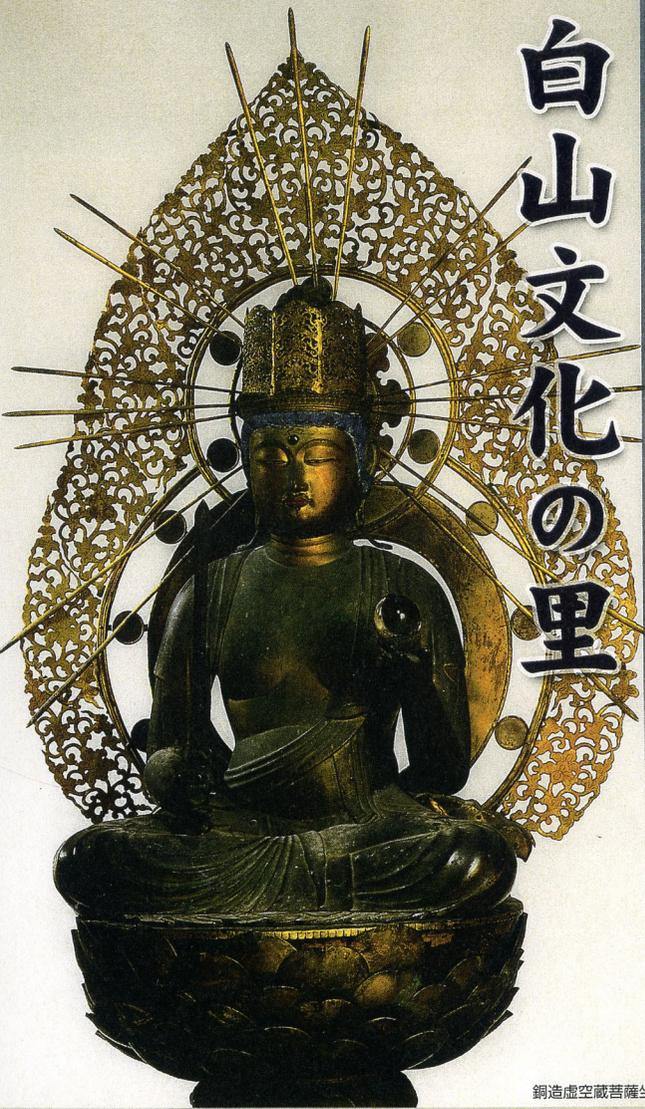


奥州藤原秀衡・義経ゆかりの地

白山文化の里



銅造虚空蔵菩薩坐像(国重文)

長滝白山神社
白山長瀧寺
石徹白大師堂
白山中居神社

白山信仰と美濃馬場

加賀・越前・美濃・飛騨・越中の5国境にそびえる白山は、富士山・立山と並ぶ三霊山の一つである。雪をいただく白山から日本海へは手取川・九頭龍川・庄川、太平洋へは長良川が注ぐ。古来人々は、豊富な水で流域を潤し暮らしを支える水の源・霊峰白山を水分神として崇めてきた。

奈良時代養老年元(717)越前の僧泰澄は白山を開踏し、白山信仰が形づくられていった。頂上の翠ヶ池で祈りを捧げると、九頭竜王が現れ、まもなく十一面観音に姿を変えたと「泰澄和尚伝記」にある。白山の祭神は、御前みねには白山妙理大権現、本地仏として十一面観音。大汝峰は大己貴尊-阿弥陀如来、別山は別山大行事-聖観音が祀られた。

平安時代の初め天長9年(832)加賀・越前・美濃側にそれぞれ登拝拠点の馬場が設けられた。美濃馬場・白山中宮長滝寺は、白山中居神社を経て白山に登拝する白山禅定道の基地として発展。治安元年(1021)天台別院となり勢力を拡大した。木曾義仲が寿永2年(1183)北陸路を都へ攻めのぼるとき、白山の三馬場に戦勝を祈願したことが『源平盛衰記』で知ることができる。

鎌倉時代には歴代朝廷や武士・豪族の信仰は厚く、寺領は飛騨国河上庄を含む広大な範囲におよんだ。白山信仰の広がりは、修験者の活躍とともに白山御師の布教活動が大きな役割を果たし、信徒は美濃・尾張・三河・遠江・駿河にまで広がり、「長滝の法水、遠近に溢れ、石に花咲く時」と評されるほど、この地に宗教文化の花が絢爛と咲き誇っていた。



お問い合わせ 白山文化博物館 TEL/FAX (0575) 85-2663
〒501-5104 岐阜県郡上市白鳥町長滝402 (道の駅「白鳥」内)



仏像奉獻と義経

平安時代末期、霊峰白山を厚く崇敬していた奥州藤原3代秀衡は、白山の麓・石徹白の地に銅造虚空蔵菩薩坐像(国重要文化財 石徹白大師堂)を寄進した。元暦元年(1184)2月秀衡は家来上杉宗庸らに仏像奉獻の旅を命じた。奥州で尊像を鑄造し、東山道・東海道を経て石徹白の地に至り、社殿を修め安置し、翌年7月に帰郷した。再び石徹白に派遣された宗庸ら小武士団は、藤原氏の滅亡によってそのまま住み着いたと、古記録「上杉系図」に記されている。

時はまさに平氏滅亡から、頼朝と義経の対立にいたる時期であった。秀衡の仏像寄進の真のねらいは、白山山伏たちのネットワークを通じて、頼朝支配地域の動向を探り、義経の奥州への逃避行を助けることにあったと考えられている。義経の逃避行ルートは通説の北陸路と違い、鎌倉時代の正史『吾妻鏡』には「伊勢・美濃を通った」と記されている。上杉宗庸たち小武士団は、義経一行を護衛し、美濃から北陸へ抜ける白山麓の難渋なコースを案内していたことをうかがい知ることができる。

中尊寺ハス

中尊寺ハスが毎年7月下旬、長滝白山神社境内で鮮やかなピンク色の花を咲かせる。藤原秀衡の没後、源頼朝に討たれた4代泰衡の首おけ(中尊寺金色堂)の中から発見されたハスの種で、1998年に約800年の眠りから覚めて開花した古代ハスである。かつての白山中宮長滝寺の梵鐘(明治32年焼失)が秀衡の寄進であったことから、奥州藤原氏ゆかりの地として2004年、中尊寺からこの地に株分けされた。



鮮やかなピンク色の中尊寺ハス(7月下旬)

